

# ガラスの海を渡る舟

もうすぐ夏休み！昨年よりは旅行など行きやすくなっているのでしょうか？

夏バテに気をつけて、あともう少しがんばりましょう

昨年の読書感想文コンクールの課題図書にも選ばれていた寺地はるなさんの『水を縫う』。読んだときに「あ、すきな感じだな」と思ったので、今回紹介する『ガラスの海を渡る舟』も楽しみにしていました。表紙のイラストが涼しげなのも夏にぴったり。舞台は大阪・空堀商店街にあるガラス工房。兄の道はみんなとちょっと違う。5つ年下の妹・羽衣子はそんな兄を疎ましく思いながらも、特別な彼を羨ましく思っているようです。正反対の2人がなぜ一緒に工房で働いているかという、祖父の遺してくれた場所だから。衝突しながらもなんとかやっている、お客さんがぼつぼつ訪れます。兄のこだわりであるものを売っているのですが、妹はそれが気に食わない。でも、その必要性に気づいて...というお話です。2011年からの兄妹の10年間を一緒に追っていると、それぞれの考え方、経験がとても身近に感じられます。どっちがいいとか正しいとかではなく、ほんとうに人はそれぞれなんだ、と思います。自分はみんなと違う、と思っていた道に祖父が言った言葉「シミラーバツノツザセイム」。数年後授業中にいきなりこの言葉を理解した道。「みんな」とひとかたまりにしておそれていた人たちも、実はそれぞれ違う、と気づきます。また、「自分にとって簡単にできることができない人もいる、と想像するのは難しいことであり、その人たちに道にとって何が困難なことか説明できるようになろう」というアドバイスももらいます。それは道だけでなく、読んでいる私たちにも当てはまることで、言わなくてもわかりあえる、と甘えてはいけないうきもあるなぁ...とちょっと反省しました。この10年の間には東日本大震災もあったし、コロナもあったし、いろいろなできごとを経てみんな今に至ります。変化し続けながらなんとか状況に適応してきた、ということがじんわりと伝わってきて、羽衣子と同年代の私も自分の10年を振り返るきっかけになりました。

寺地はるな

1977年、佐賀県生まれ。大阪府在住。2014年、『ピオレタ』で第4回ポプラ社小説新人賞を受賞しデビュー。2020年、『夜が暗いとはかぎらない』が第33回山本周五郎賞候補作、令和2年度「咲くやこの花賞」(文芸その他部門)受賞。2021年、『水を縫う』が第42回吉川英治文学新人賞候補作にノミネートされ、第9回河合隼雄物語賞を受賞。『大人は泣かないと思っていた』『今日のハチミツ、あしたの私』『彼女が天使でなくなる日』など著書多数。